

《BOOK》

『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』

土井隆義著 ちくま新書 756円 (税込)

本当の話がしたい

奈良県インターネット掲示板差別書き込みについて考えるプロジェクト会議メンバー 黒田 恵裕

子どもたちが「部落地名総鑑」を作り、ケータイでネット共有する時代がやってきてしまった。機種によっては、実際のパノラマ写真を組み込んだ地図と連動させることさえ可能だ。在日コリアンの芸人やすポーツ選手の一覧などという悪意を込めたリストも簡単に手に入り、「受けるネタ」としてコピー(コピー&ペースト)されネットを通じて広まってしまう。現実の結婚差別事象につながった例もある。また、容疑者が未成年のため、報道では学校名や名前が伏せられていても、ネット上ではそれも暴露され、実は在日外国人だとか、被差別部落出身だとか、顔写真は、親の仕事は、住所は、メールアドレスは、などという不確かで偏見に満ちた情報が次々と更新される。日々の生活でも、子どもたちは、電子掲示板やブログやプロフの日記などに、学校や教員への不満、友だちの悪口を書き連ね、カメラやムービー機能にGPS機能まで組み合わせて友だちを攻撃し、匿名やなりすましで姿をくらます。傷ついた子どもは、新たな書き込みに怯え、無言の閲覧者におののき、誰も信用できなくなる。死を選ぶ子どももでてくる。

「何てことだ!子どもたちはどうなってしまったのか!」と、焦るのは当然だ。実際に差別事象や悪質ないじめが起きているのだから、家庭も学校も地域も行政も関連企業も、すべてが真剣に対応する必要がある。一方、「子どものすることは大人の鏡」でもあるのだから、子ども以上にネットマナーのなっていない大人たちへの対策も急務だ。

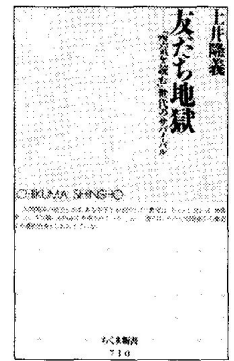
もちろん、大半の子どもは、こうしたケータイ・ネット事情をよく思っていないし、悪質な「学校裏サイト」なんか見たくもないと思っている。メールの作法も繊細だ。一部の子どもたちが追いつめられ、悲鳴をあげているとみるべきではないか。

社会的な問題は、個人の次元にすべてを還元できないし、社会一般を問うだけでも解決しない。個人の問題でもあり、社会の問題でもある。いや、個人と社会の関係の問題といえるだろう。したがって、子どもにのしかかる関係不全を考える必要がある。

ケータイ・ネットの危機的状況から垣間見える子どもたちの悲鳴は、「本当の話がしたい」という悲痛な訴えではないか。これは、「一部の不心得な子

ども」の問題として限定されるものではない。ケータイ・ネットに親しむ大半の子どもにも言えることだろう。

ケータイ・ネットの諸問題を扱う書籍は次々に出版されているが、子どもの自我の発達と現代的しんどさに向き合おうとする書籍も手にとっていただきたい。そこでようやく図書の紹介だが、『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』(土井隆義著、ちくま新書、2008)をお薦めしたい。



- ・「ケータイは、危うい人間関係のなかで自分の位置を知るための、いわば社会的GPSの装置」
- ・『『優しい関係』にとって、いじめは触媒のようなものである』

といった表現から、読み始めは「言葉に巧みな学者」という印象を受けるかもしれない。しかし、著者自身もまた「生きづらさ」を抱えて生きてきたというだけに、その言葉は巧みさ以上に胸に突き刺さる示唆に満ちている。「子どもからケータイを取り上げろ」という威勢のいいかけ声よりも、傷つきながらもケータイに依存せざるをえない子どもに大人はどう向き合うのかを丁寧に考え、リアルな関係で本当の話をするべきなのだ。子どもたちはそれを待っている。

自我の発達と子育てという問題は、ケータイ以前からある課題だが、インターネットに簡単にアクセスできるケータイを手に入れた子どもたちは、増幅された感情がナイフと化して自他を傷つける世界に取り込まれたといえる。そして、そんなナイフの切れ味を踏まえたケータイ・ネット生活の術を身につけるなかで、同調圧力が子どもの息を潜めさせ、些細な悪意や誤解は拡幅して、「もりあがるネタ」から一挙に悪者が仕立て上げられる。

「教室は たとえて言えば 地雷原」。著者が紹介するある中学生の川柳は、そうした濃密で息苦しく荒涼とした時空間が子どもを取り巻いていることを悲しくも暗示する。他者の痛みを受けとめ、違いを認め合う人権学習がなぜ難しくなっているのか、ここにヒントを読み取ることができる。